

### 第3章 ハスの列車に乗って

しなびたトマト

「ふ〜〜っ、おなかいっぱいだね」

エイミーとバーバラはお互いの顔を見ていました。

「ほんとうによく食べるんだからな、ふたりとも。おいらなんかおにぎり2つとトマトだけだぜ」

「なにいつてんの。まだサラダはいっぱい残っているわよ」

バーバラがトミーにいいました。

「エイミーもほらトマト作ってるけど、あんまし食べないぜ。それとバーバラのお母さん特製のハンバーガーは少し大きすぎてもうおなかいっぱいだね」

「あたいはトマトは作っているけど食べるのは苦手ね。バーバラ、ほら、向こうにお花が咲いているわ。見に行きましょう」

「ほんとうだ。トミー、あんたも行く？」

「おいら、いかないよ。花なんてき。ところでサムライごっこやろうぜ」

「あんた、1人でやっているといいわ。エイミーとってくるからお留守番しててね」

とって2人は食事を適当にバッグにかたずけて、春真っ盛りの花の咲いている方へ歩いていきました。

「ちえ、おいら、お留守番かよ。まあいいけど、おなかいっぱいだから寝ていようかな？」

トミーはそうやって草のベッドの上にごろんと横になりました。まだ春の日差しがすがすがしく気持ちよく、トミーはすぐに夢の中に入ってしまった。

**【うるさいやつらがいなくなってよかった、よかった】**

トミーは1時間近く寝ていましたが、なにやら不思議な夢を見たようです。そこへエイミーとバーバラが戻ってきました。

「トミー、ただいま・・・」

とバーバラがいいかけて、それがすぐ大きな叫び声に変わりました。

「トミー、あんた、おなかいっぱいって言って、なによ、この散らかしようは・・・」

バーバラがトミーの頭を少し小突きながら大声でいいました。

「・・・ん？なんだってんだよ～～」

「さっきかたずけた食事がくちゃくちゃじゃない」

「・・・ん～～～？・・・えっ？なにこれ？」

トミーも切り株の上の散らかりようを見てびっくりしています。

「ええ～～、おいら、知らないよ。なにも食べてないもん。だって寝ていたんだぜ」

「じゃあ、あんた以外に誰がいるっていうのよ」

バーバラがトミーを追い立てます。

「ちょっとまって」

「どうしたのよ、エイミー」

「だってほらこのトマト、変な食べ方してるよ」

それを見るとかじったというより、しなびています。



「ほんとだ！なんか干からびているよ、ね、バーバラ」

「どれどれ、なんでこんな風になってるのかしらね」

「それにハンバーガーやハムにはまるで手がつけられていないし」

エイミーも不思議そうな顔でいました。

「確かに、野菜嫌いのトミーの食べ方じゃないよね」

「おいら別に野菜嫌いじゃないよ、野菜嫌いはエイミーじゃないかよ。まったく男って損な存在！」

「まあまあトミーもおこらない」

エイミーは切り株の上のしなびたトマトを手にしてあたりを見渡しました。その時、10メートルほどの近くの茂みの中でガサゴソと音がしました。

「そこになにかがいるわ」

エイミーはその茂みを指差していいました。

「クマかもしれない」

「バーバラ、ここでクマを発見したら、おいらたち表彰もんだよ」

「いやだ、こわい。ほらサムライ、何とかしなさいよ」

バーバラはトミーの背中を突いていいました。トミーは刀のつもりの棒を手に取りいいました。

「お、おい！き、きみ・・・なんかいるならいるっていつてくれな  
いかなあ・・・」

「トミー、そんなところでいってもダメよ。もっと近づいていわな  
きや」

バーバラがけしかけます。

「だ、だって、んなこといったってさあ・・・」

そのときエイミーがその茂みに近づいていきました。

「エ、エイミー、だ、だいじょうぶ？」



「あら、あなたたちは、この間噴水のところにいた友だちくんじゃないのかしら？」

見ると茂みの中にぬいぐるみを着た子供のような背たけの二人が出てきました。エイミーから5メートルほどの位置にいます。バーバラとトミーはエイミーの後ろ2メートルほどのところにいて、おそるおそるエイミーに近づいてきました。

「クマじゃないけど、だいじょうぶかしら」

バーバラがエイミーの後ろまでやってきていました。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。ところであなたたちがトマトを食べたのね？」

エイミーはもう少し二人に近づいていました。

## 友だちくん

「あなたたちは、友だちくんね。こんなところで何しているの？」

エイミーはもう1メートルくらいも前でそういいました。バーバラとトミーも恐る恐るやってきました。

「と、ところでさあ、エイミー、知ってんのこの子たちのこと？」

バーバラはトミーの後ろからいいました。

「まあ知ってることになるのかなあ？この間の噴水の前にいた子たちよ」

「はじめぬいぐるみかと思ったけど、微妙に顔が動くし、なんかすごいメカニズムだね。おいらトミー、君たちの名前は？」

『……』

「ほら、君らの名前だよ。おとうさんとおかあさんにつけてもらったなまえ……」

『……』

「も、もう、名前はなんていうの！」

『わたしはあなたのお友だちよ』

ぬいぐるみを着た子供のような背たけの二人は一緒に同じことをいいました。



「この間もそうだったわ。わたしはあなたの友だちだって・・・」

『わたしたちはあなたたちのお友だちよ』

「今度はあなたが、あなたたちになったわ」

「エイミーだけじゃなくわたしたちもいるからなのね」

「でおいら、友だちだってのはわかったけど、名前はなんていうの？」



『わたしたちはあなたたちのお友だちよ』

「ま、それじゃそれでいいけど、どっからきたの？」

『・・・』

二人は何も言わずに自分が茂みから出てきた方向を指差した。

「いってることはわかるみたいね、エイミー」

『・・・』

何かいいたそうにエイミー、バーバラ、トミーの横をすり抜けて、食事をしていた切り株のところに来ました。エイミー、バーバラ、トミーもつられるように一緒に切り株の方に近づきました。

『・・・』

「なんだって、そのトマトのことかい？」

トミーがしなびたトマトを手に持っていいました。

『・・・・・・・・』

二人は指を自分たちの口に向けて、口をパクパクさせました。

「あんたたちが、食べたってこと？」

バーバラがいました。

「ほらね、おいらじゃなかったろ」

「おなじようなもんだ。トミーが寝ていて番をしなかったんだから」

「どうしておいらが怒られるの？男って損な存在！」

「まあそれはともかく、お友だちさん。おなかですいているならもっと食べてもいいよ」



エイミーがそう言って二人におにぎりを渡しました。二人はそのおにぎりを受け取って、不思議そうな食べ物だとばかり、お互いの顔を見て少し首を縦に振りました。

「ヤパニーズのファーストフードのおにぎりだよ。おいらも大好きなんだ」

二人はそのおにぎりを口の前に運んだかと思うと、口をつけました。おにぎりはみるみるうちにスーっと小さくなり、消えてしまいました。

『・・・・・・・・』

二人は少し笑ってぴよんぴよんと弾んで喜んでいるようです。

「うれしがってるよ、エイミー」

トミーがいました。

「それにしても変わった食べ方ね。おにぎりが吸い取られていくみたい」

バーバラがいました。

「いっしょに遊ぼうか？」

エイミーが二人にいました。

「わかるかな、遊ぼうってさ」

『……』

二人はまたびよんびよんと飛び跳ねて茂みの方へ戻っていきこうとします。トマトのような一人の子が切り株の食事を指差しています。



「持っていけって言うこと？」

「もっとほしいんじゃないの、バーバラ」

トミーがいました。

「どちらにしてもリュックに入れてかついでいきましょ」

エイミーが少し笑いながらバーバラとトミーにいました。そしてそれぞれ持ってきたリュックやバッグを持って、二人の後についていきました。

### ハスの電車に乗って

「ずいぶん中に入ってきたけど、これって雑木林の中だよね。なんだか怖いわ」

バーバラがエイミーに向かっていました。

「そうね、どっちの方向かわからないわね」

しばらく行くと林の中にできた緑に囲まれた空間が現れました。その空間は結構大きく、少し細長い林の中の緑の空間でした。

「林の中のちょっとした広場だね」

トミーがいました。

「こっちに出口があるわ」

バーバラが光が差し込んでくる方向を指差していました。エイミーたち3人とトマトとみかん星人のような2人は光の差し込むところまで来ました。

「あら、この入り口って見覚えがあるわ」

エイミーがいました。

「ほんとうだ。さっきおいらがコケを捨てたところだよ。だって石でマークしたもん」

トミーも自分の置いた石を見つけていました。

「と、ということは、ここはあの中なの？」

エイミー、バーバラ、トミーはそれぞれが顔を見合わせながら叫びました。そうです。さっき三人でいた不思議な雑木林の光る場所の中側にいたのです。



「トミーのいうとおりだわ。ここはあの光る雑木林の中なのよ」

「いやだ、こわい。はやく出ましょ、こんなところ」

バーバラはエイミーの顔をみていました。その時、みかんの顔の1人がバーバラの手をつかんで、別のところを指差しました。

「えっ、そこへ行こうっていうの」

バーバラはなぜか不安が消えたような感じでいました。

「この子たちがあっちへ行きたいんだって」

「だ、だいじょうぶかよ、バーバラ。だってすごく怖そうにしていたんだぜ」

「そ、そうだけど。なぜかだいじょうぶかな・・・なんて」

「いいわ、ついて行って見ましょ」

エイミーがそうだったので、バーバラもトミーも、トマトとみかんの2人についていくことにしました。

「おいらたち完全にイカレポンチだぜ」

「そうよ。見つかったらただじゃすまないわよね」

バーバラもそうはいうものの、少しこの先に興味があるようです。トマトの1人が大きな空間の緑の壁の茂みをかき分けて、中に入るようにいいました。エイミー、トミー、バーバラの順に中に入り、最後にみかんの顔の1人が入りました。よく見ると大きなハスのような植物の葉が地面に置いてあります。その地面は土ではなく緑色で、キラキラと光っているコケのような植物がありました。ハスの葉は直径が1メートル以上ありそうです。



『・・・・・・・・』

「乗れっていうの・・・エイミー、バーバラも乗れってさ」

「あんた本当にその子たちのことがわかってんのかしら」

「バーバラ、だってそういっているような気がするもん」

「まあいいわ。それじゃあ乗ってみましょ、バーバラ」

「エイミー、本当にだいじょうぶ？ トミーが先に乗るといいわ」

「おいらもう乗っかってるよ」

バーバラが後ろを見るともうトミーはそのハスのような葉に乗っていましたが、なにかしらふわふわと浮いています。

「ねっ、バーバラもやっごらんよ。ふわふわ浮いて気持ちいいよ」

「あんたわかってんの？ なんでそれって浮いてんのよ？」

バーバラはトミーを見て叫ぶようにいいました。トミーもあわてて自分の乗っている大きな葉と地面の間を見ていいました。

「か、考えてみたら、そりゃあそうだ。何で浮いてんのだろう？」

『・・・・・・・・』

「エイミー、バーバラにも乗れっていつてるみたいだよ」

「あんた本当にわかっていつてんの？」

「バーバラ、怒らないでよ。だって本当にそう聞こえるんだもん」

エイミーとバーバラもトミーにいわれるように、自分に近いハスのような葉に足をかけました。そして二人とも葉の上に乗りました。すると突然 10センチメートルほど上に浮くではありませんか。

「う、うわっ！浮いたわ！」

バーバラは思わず少し大きな声で叫んでしまいました。

「エイミーはどう？」

「あたいもほら浮いたわよ」

『……』

「一緒に遊ぼ？」

トミーがいました

「一緒に遊ぼうっていつてるよ」

「トミー、あんたは自分の好きに想像できていいわね」

「んなことないよ。だってそう聞こえるもん、ほんとうに……」

トマトとみかんの2人は、トミーとバーバラとエイミーの3人をはさんで、前と後ろにつき列車のようになりました。



『……』

「出発進行う〜〜〜！」

「トミーって本当に想像力が豊かだね、エイミー」

「そ、そうだけど、動き始めたわよ」

トマトの子を先頭にトミー、バーバラ、エイミーの乗った大きな葉が連なり、みかんの子が最後について列車のように動き始めました。

「いやっほ～～～」

トミーは男の子なのか、列車ごっこと思っているのでしょうか。おおはしゃぎです。

### ビッグドラゴンフライ

「きれいね」

エイミーもバーバラも過ぎていく林の緑が美しく、つい見とれてしまいました。トミーも後ろのバーバラの方を見ていました。

「バーバラ、緑のトンネルみたいだね。とってもきれいだね」

「トミー、それはいいけど、あたしたちどこに向かっているのかしら？」

「だいじょうぶだって、だって今日は土曜だし、学校休みだし」

「そ、そういう問題じゃないと思うんだけど・・・」

少し速度が上がったのか、緑の景色が後ろに去っていくのが速く感じられます。

「だけど、ずいぶん奥に来たわよね」

エイミーは自分の前にいるバーバラに向かっていきました。それもそのはずです。先ほどいた大きな空間ではなく、明るいトンネルのように長く続いているからです。緑の壁はどんどんと後ろに追いやられていきます。

「緑のトンネルだね、エイミー」

大きな葉の走行する速度は、感じでは時速 50 キロメートルくらいでしょうか？ 結構なスピードです。林の緑は手を伸ばせば届きそうなので、ものすごい速度で移動しているように感じられます。いろいろな色の緑が前からやってきては後ろに遠ざかっていきます。

「結構スリルあるわね、バーバラ」

「マロン村のバスより乗りごごちがいいわ、エイミー」

「そりゃ、浮いてんだもん、バーバラ」

しばらくして、そう乗ってからまだ数分しか経っていないのですが、縦横5、6メートルほどのトンネルから突然広い空間に変わりました。



「エイミー、バーバラ、なに後ろではなしてんだよ～～？」

「トミー、まるでどこか地下鉄の駅みたいな所に出たわよ」

「林の中の空間ね、バーバラ」

そこに大きな緑の空間が広がっていました。でも空は見えません。ハスの葉はここで一旦、停止しました。

「これってひょっとして夢なのかしら？」

エイミーはそうやってほっぺをパンパンはたいてみました。

「い、痛い！夢じゃないわ、やっぱり」

「ここはどこ？エイミー、あたしたち、とんでもないところに来たんじゃないかな？」

先頭のトマトの子が降りたので、トミーもバーバラもエイミーもつられてその葉を降りました。浮いていた大きな葉は、静かに地面の上に戻りました。

「ある意味、ジェットコースターよりすごかったね」

トミーがいました。

「冷静になって考えるとすごいなんてもんじゃないよ、きっと。だって空中を葉っぱが浮いて移動してんだよ」

バーバラはそんななか落ち着いた顔でトミーに話します。そこへトマトとみかんの二人が、なにやら話をしながらやってきました。

『・・・・・・・・』

みかんの子が紙を取り出して絵を描き始めました。

『・・・・・・・・』

「すぐわかるよ、トンボだね」

トミーがいました。

「それで、トンボがどうしたっていうのかしら？」

バーバラがそういいながらじっと描いている絵を見えています。

「そこにあんたが乗るのね。ええーっ、そんなに大きなトンボなの？」

バーバラはトンボのようなものにまたがったみかんの絵をみて少し大きな声で叫ぶようにいいました。

「でも絵はうまいなあ、ねっ、バーバラ、エイミー」

「そうねえ、でもなにが良かったのかなあ？」

エイミーはバーバラとトミーの顔を見ながらいいました。絵はトンボのようなものが2匹と、それにそれぞれみかんの子と、トマトの子がまたがっています。その後ろに女の子が二人、男の子が一人、それぞれ三人と二人が大きなトンボにまたがっています。

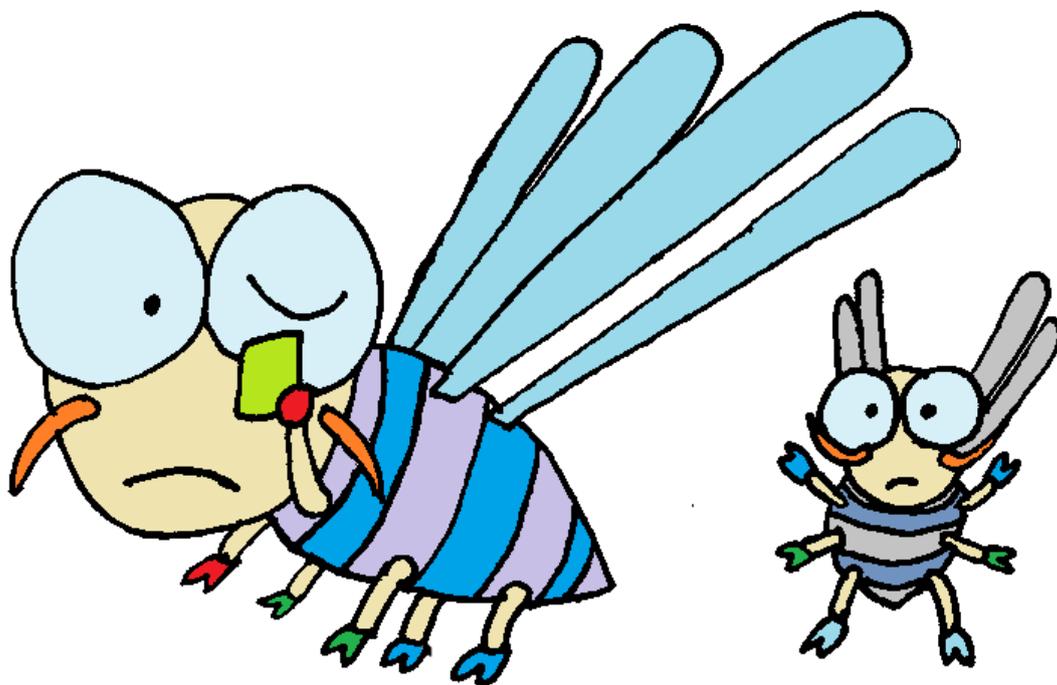
「ひょっとして、その後ろの子たちはおいらっちのことかな？」

『ウンウン』

とみかんの子はうなずいたようなしぐさをしました。

「ええ～～どこにそんなトンボなんているのよ。そんなの見たこと  
ないじゃない」

バーバラはいっそう大きな声で叫びました。するとトマトの女の子  
が羽を広げると5メートルはありそうなトンボのような生物の手を  
引っ張ってつれてきました。トンボのような生物はなんか眠たそう  
です。



「ひえ～～、こっ、こわ～～・・・くないね、なんか・・・」

おもわずトミーがいました。

「目があたしたちの頭くらいあるわ」

バーバラも首をすぼめていました。

「そうね、本当にこれって夢じゃないかしら」

エイミーは今度はバーバラのほっぺをつねってみました。

「痛い、痛い～～っ。何すんのエイミー……」

やはり夢ではありません。

「……ったく～～～」

『……』

「乗れっっていつてるみたいだぜ」

トミーが一匹のトンボみたいな生物に乗ったトマトの子を指さしていいました。すると別の一匹もノソノソと茂みから出てきました。

【ああ～～あ、よくねたなあ。さあ、もう帰ろうか？あっ、誰かいるの？】

「あれ、話してるのがわかるわ。どうしたのかしら？」

エイミーはバーバラとトミーの顔を見た後で、トマトの子の乗ったトンボのような生物を見ていいました。

【そうなんだ。ボクの名前はスカイブルー、ビッグドラゴンフライ部隊の隊長さ】

「どうして言葉を話せるの？」

エイミーがスカイブルーにたずねました。

【彼女たちも話をするよ。僕らとは話をするよ。でもまだきみたちとは話ができないんだ。すぐにわかるよ】

スカイブルー隊長はエイミーたちに向かっていいました。

『・・・・・・・・』

「でもなんとなく、おいらには話していることがわかるんだ。今また乗れっていったような気がしたんだ」

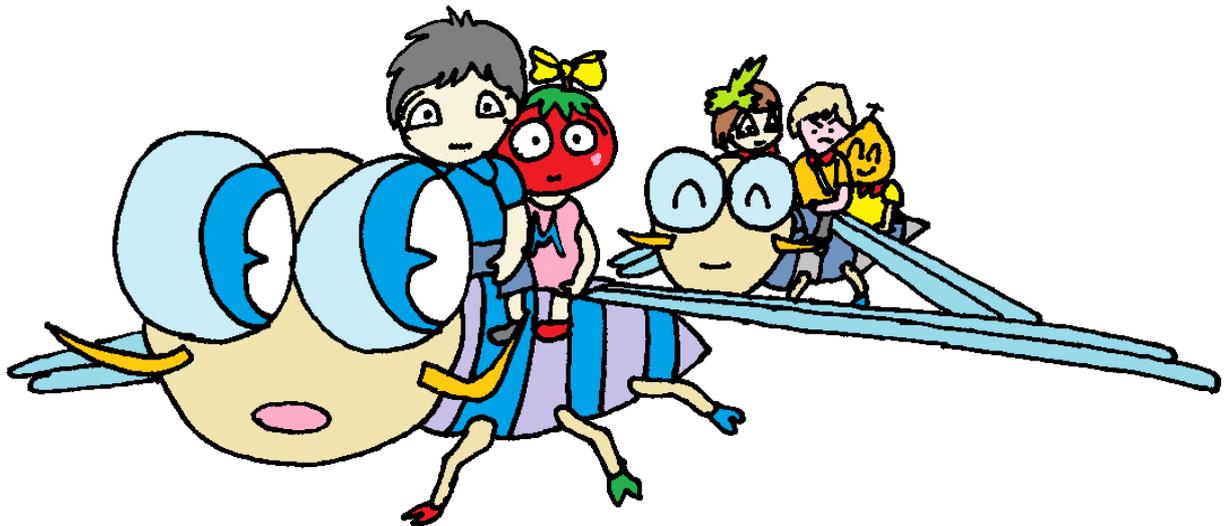
トミーがスカイブルー隊長に向かっていきました。

【そうなんだ。それもいずれわかるよ】

「で、こ、これに乗るの？」

バーバラがスカイブルー隊長の背中を見ながら、おそるおそるたずねました。

【さ、こうすると乗りやすくなるんだ】



バーバラの前でスカイブルー隊長が6本の手足で体を支えながら、体を地面に横たえるように低くしました。そこにトマトの子が乗りました。

『・・・・・・・・』

「じゃ、おいらが先に乗るよ。乗れっていつてるんだから」

トミーがスカイブルー隊長の背中の上に、トマトの子の後ろにまたがりました。もう一匹の別の大きなトンボも眠そうな目をこすりながら、みかんの子を背中に乗せてやってきました。

『……』

「あたしたちに乗れって？」

バーバラがエイミーの顔を見ていました。

「バーバラ、あんた、いつてることがわかるの？」

「そ、そういえばトミーがいうように、そういったような気がして……」

「ど、どうしてだろうな？あたしだけがわかんないのかな？」

バーバラが先にもう一匹のトンボのような生物の背中にまたがり、エイミーもそれに続きました。

『……』

「ええ～～、また出発進行？」

エイミーがいました。

「エイミーにもわかるじゃないよ」

バーバラが後ろを振り向いていました。

「そ、そうね。なんだか夢のようだけど、これって夢じゃないんだよね」

「いやっほ～～～！出発進行お～～～！」

トミーがスカイブルー隊長の背中の上から、エイミーたちのほうを振り向いて、手を振って叫びました。スカイブルー隊長が体に平行して横にたたんでいた羽を広げると、羽ばたくこともなくふわっと1メートルほど浮き上がりました。

「す、すげえ！」

エイミーとバーバラの乗るもう一匹もスカイブルー隊長の後ろにつき、同じように浮き上がりました。

「なんかすごすぎる気がする」

バーバラも後ろを向いて、エイミーに話しかけました。

「たっ、たしかに・・・」

エイミーも言葉が出ません。スカイブルー隊長ともう一匹はそのままその駅のような空間を準備運動のように2回、3回と旋回したかと思うと、来た方とは別の緑のトンネル、つまり進行方向に向かって高さ5メートル、横5メートルほどの空間を、ちょうど半分の2メートル半ほど浮きながら飛んで行きました。

**やってきたレタチンの国**

『・・・・』

「そんなにスピードが出せないから少し時間がかかるって・・・。  
いったい何のこと？」

エイミーにもバーバラにもトミーにも言っていることがわかったものの、意味がわかりませんでした。実はこのトンネルは時空を越

えるトンネルです。時空を超えるとはどんなことなのでしょう？時は時間、空は空間を指していますので、時間と空間を越えることになります。時空を超えるということは実は空間を越えることにより、時間も結果的に越えることになります。

空間を越えるには大きなエネルギーが必要です。力づくで空間を曲げて広げるには大きなエネルギーが要り小さな生物には無理です。そこであらかじめ曲がっている空間を見つけ、生物の力を借りてその空間を広げ移動します。この生物をビッグドラゴンフライは羽や体に付け、緑との間との反発力を利用して移動しているのです。

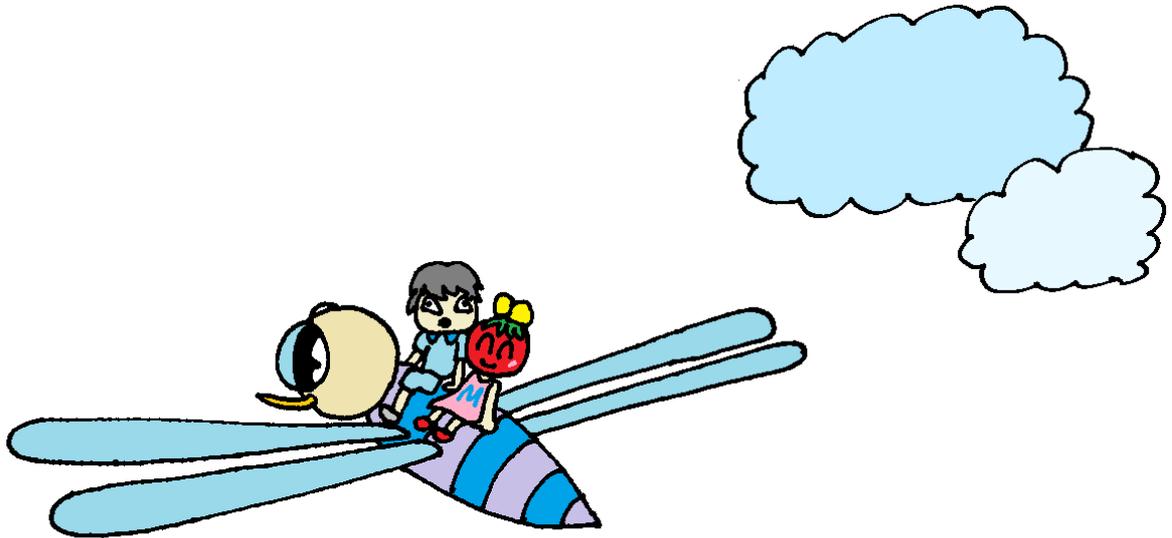
**【トンネルの中ではあんまり力を使わなくてもだいじょうぶさ】**

スカイブルー隊長はいいました。速度はというと1メートルほど向こうの両側の緑は、さっきのハスの葉の数倍のスピードで後ろに追いやられています。時速は200キロメートルを超えている感じですが、空間をワープしているので実際の速度というものの意味がありません。速度を比較するものがないわけです。そうして2匹のビッグドラゴンフライは光るマユのように楕円の球になり、ますます速度が上がっていくかのように見えます。

時空を超えているので時間もここでは意味がないのですが、そうです。感覚的には30分くらいが経過したのでしょうか、ビッグドラゴンフライの光るマユは消え、速度がだんだんとゆっくりになってきました。緑のトンネルの出口のようです。光に向かってビッグドラゴンフライのスカイブルー隊長が一直線に飛んだかと思うと、空に向かって一気に急上昇しています。

「あら～～っ、マロン村にもどって来たわ」

エイミーが叫びました。



「ほんとだ～～すげえ～～空を飛んでるぜ！」

トミーも後ろに続くもう1匹のビッグドラゴンフライに振り向きながらいいました。二匹のビッグドラゴンフライは緑のトンネルを抜け、緑の畑の広がる上空へ舞い上がりました。そして10分ほど飛んだかと思うと、集落の見える芝生のような場所に降り立ちました。

**【おつかれさん】**

スカイブルー隊長がいました。

「あ、ありがとう、スカイブルー隊長、どの」

トミーが答えましたが、エイミーもバーバラも辺りを見回して、何が起きているのかあまり理解ができません。

「トミー、あんたってほんとにノー天気ね」

バーバラがスカイブルー隊長がまた空高く戻っていくのを見ているトミーにいいました。

「ん？な、なんかいった、バーバラ・・・」

2匹のビッグドラゴンフライを見送ったトマトとみかんの子たちがエイミーたちのところへ来ました。

『・・・・』

「だいじょうぶか？だって？」

トミーがいいました。

「そ、そりゃ、こうしているからだいじょうぶだけど、いったいここはどこかしら？」

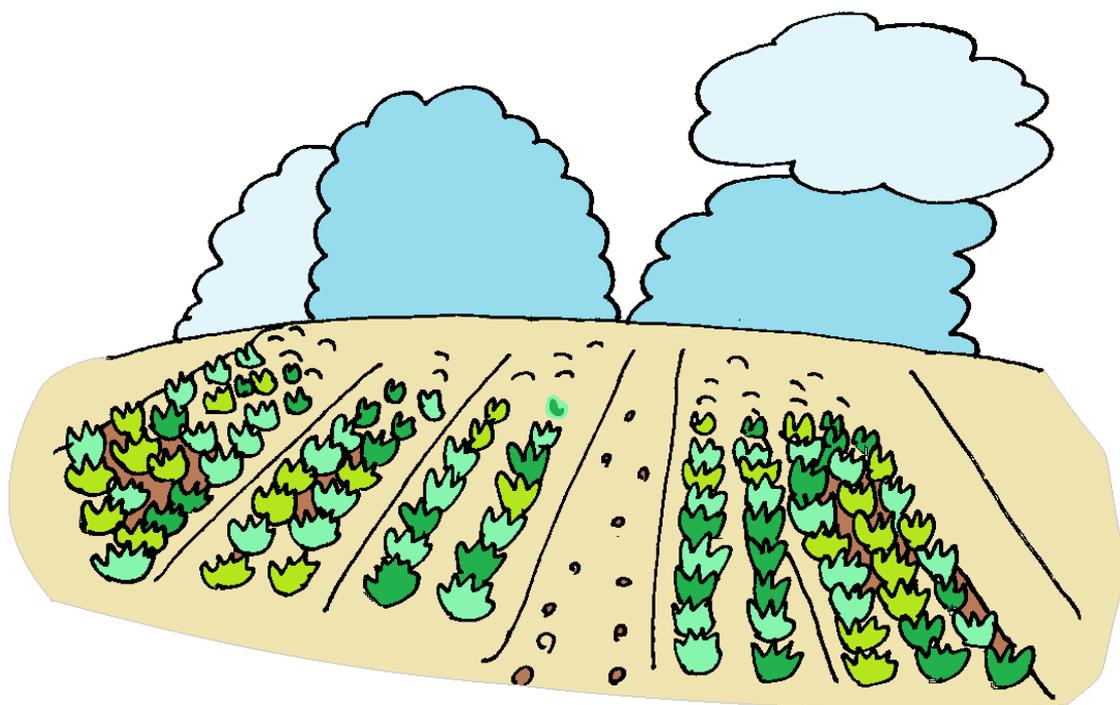
エイミーがトマトの子を見ていいました。

「マロン村じゃないみたいよ。だってこんなレタスなんてまだできていないよ」

周りを見るとレタスのような緑の野菜は一面に育っています。まだ4月ではレタスはマロン村では生長していないのです。

『……』

「少し歩いてみるの？」



エイミーはトマトの子にいいました。バーバラとトミーも一緒になって、トマトとみかんの子についていきます。トマトとみかんの子の背たけは1メートル20センチか30センチメートルくらい、ちょうど小学生の低学年くらいの身長です。

「ちょ、ちょっとまってよ、エイミーただいじょうぶ？あたしは心の準備ができていないよ」

バーバラが不安そうにいいました。

「そうだよ、バーバラ。これって夢じゃないよ、だってさっきお弁当食べたけど、夢の中じゃおいしくないもんね」

トミーがバーバラに話しかけます。

「たしかに絶対に夢じゃないってことはいえるわね。だってもうほっぺたが痛いもんね」

エイミーはなんどもほっぺをパンパンしているからです。自分たちの住んでいるマロン村とよく似ていますが、なんか少しずつ違う風景です。三人はレタスとトマトとオレンジの子の後について歩き出しました。



<フレンズが育てる大切なもの>



フレンズは生活のためのエネルギーと、もうひとつ大切なものを育てています。大きな浮かんだハスの葉がゆりかごのように、それを育てています。

これはなんでしょう？とっても大切なものですよ。後で出てきますから、覚えておいてください根。ねが根ですがわざとです。